

# 教師の授業力量向上を支援するツールの開発からみえる教師教育の課題

高谷 哲也〔鹿児島大学教育学部(教育学)〕・黒光 貴峰〔鹿児島大学教育学部(家政教育)〕

## A Consideration of Teacher Education : A Case Study of Development of an Assessment tool for Teacher Development

TAKATANI Tetsuya · KUROMITSU Takamine

キーワード：教師教育、家庭科、職能成長、授業研究

### 1. 研究の背景と目的

本稿は、教師の授業力量の向上を目的としたツールを開発していく過程で浮上した、検討課題や議論の内容を通して、現職教員が抱えている力量観や職能成長観の内実と、教師教育の課題について論考するものである。

現職教員の職能向上をいかに実現していくかは、いつの時代においても重要な課題である。特に、日々の仕事に追われ、精神的にも物理的にも職能向上に取り組む余裕を確保することが困難な現在の学校現場の実態の中で、教員一人一人が、時代の変化に対応し、生涯を通じて職能向上を実現していくためには、教員自身に向上心や研究力が求められる一方で、それを支える仕組みやツールの開発が求められよう。その際に、それらは、学校現場で教員が直面している現実や、当事者である教員の感覚や認識と整合している必要がある。

そこで、本研究が調査の対象とするのは、平成22年度独立行政法人教員研修センター「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」採択事業の一環として行われた、「家庭科授業支援シート」の開発プロジェクトにおける取り組みである<sup>1</sup>。プロジェクトは、中学校家庭科教諭、教育委員会指導主事、教育センター研究主事、大学教員等からなるメンバーが、授業力量の向上と、授業研究の活性化を目的とした、「授業研究支援シート」を開発していくものである。その過程では、教師が自身の授業力量を把握するにはどのような項目が必要か、それはいかなる指標を用いて把握することが適当か、実際に学校現場で活用しやすい内容や形式とはどのようなものかなど、様々な議論

や開発課題の確認がなされた。

本研究は、それら開発過程において直面した課題や議論の内容の特質に着目する。なぜなら、そこにこそ、教師に求められる力量や成長の道筋を現職教員がどのように認識しているか（「現場の理論」<sup>2</sup>）が表出していると考えられるからである。つまり、本研究の目的は、現職教員自身が、家庭科教諭に求められる授業力量をどのようにとらえており、その力量の向上を支援するためのツールには、どんな要件が必要だと考えているかを丁寧に把握していくことであり、それは、学校現場で現実的に有効に活用することのできるツールの開発を進めるうえで、極めて重要な研究テーマである。また、現職教員の職能向上をいかに実現していくかを論じるうえでも確認しておくべき知見を得ることができるとともに、そのようなツールの開発のあり方（主体や手続き等）にも示唆を得ることができると考える。

### 2. 「家庭科授業支援シート」開発のプロセス

家庭科用の「授業研究支援シート」は、「家庭科授業支援シート」（以下、「支援シート」と表記する）という名称で、2010年度に、図1に示すようなプロセスを経て開発が進められた。開発プロジェクトの構成メンバーは、中学校家庭科教諭2名、県教育庁義務教育課指導主事、教育センター研究主事、大学教員1名（に加え、参与観察者としての筆者1名）であり、図1に示した第1回から第8回の検討ならびに12月4日のプロジェクト会議はこれらのメンバー間で行われたものである。

図1からわかるように、「支援シート」は、約

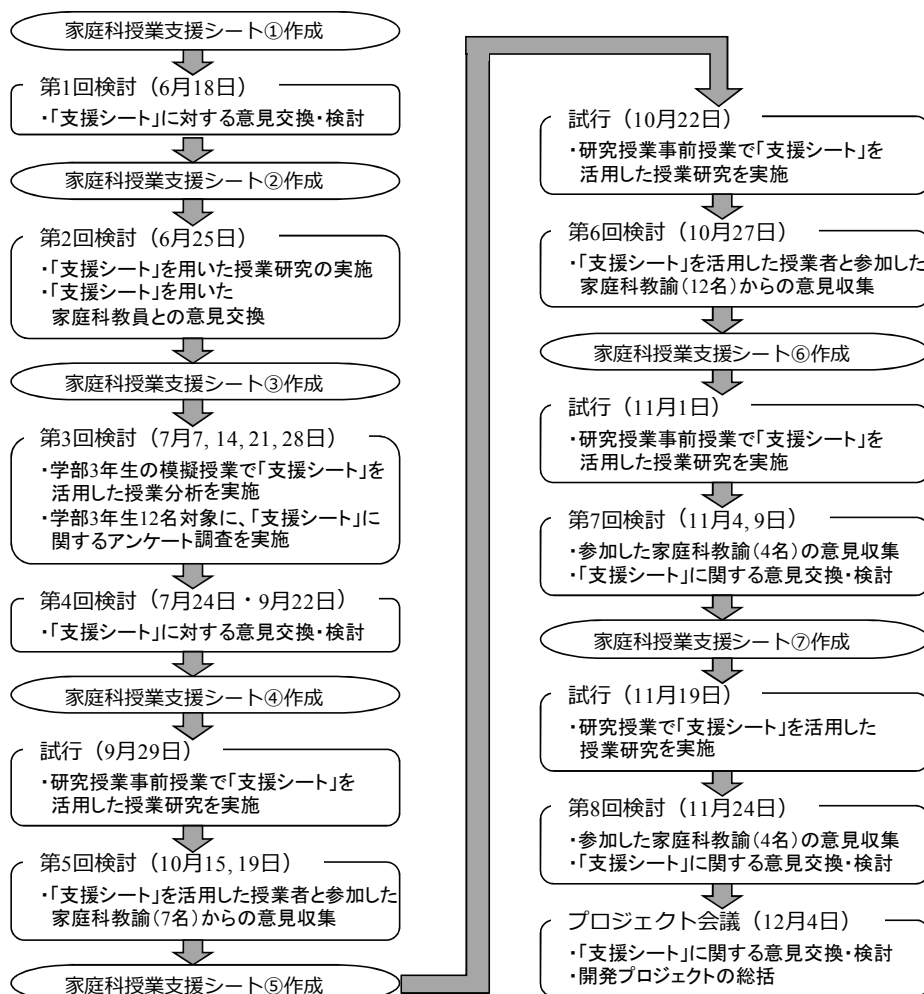


図1. 家庭科授業支援シートの開発プロセス

半年間の開発過程で、6回の修正がなされている。開発は、「支援シート」の内容検討・作成、授業研究での試用、内容や使い勝手についての意見交換、修正の繰り返しによって進められた。開発を進めるにあたって、大学側で「支援シート」のたたき台として「家庭科授業支援シート①」を作成し、その内容や形式等について、上記プロジェクトメンバーで2010年6月18日に、第1回の検討を行っている。そこでの意見交換・検討内容を踏まえて「家庭科授業支援シート①」を修正し作成したものが、「家庭科授業支援シート②」である。以降、作成した「支援シート」を授業研究や模擬授業等において実際に使用し、その都度使

い勝手や内容の妥当性等についての意見収集を行い、プロジェクトメンバーで修正案を作成していくサイクルを繰り返している。本研究が考察の対象とするのは、その繰り返しの中で確認された、実際に「支援シート」を活用した家庭科教諭から出された意見、プロジェクトメンバーでやりとりされた議論の内容や確認された課題、それらを踏まえて修正がなされていった各段階の「支援シート」の内容である。

### 3. 「家庭科授業支援シート」の使用場面と構成

以上のように進められた「支援シート」の開発

表 1. 家庭科授業支援シート①

		チェック項目		A	B	C	D		
① 家庭科教科観	教科論		1	なぜ家庭科は必要か？	(自由記述)				
	目標論		2	家庭科は何をめざすべきか？	(自由記述)				
	カリキュラム構成論		3	カリキュラムとして何をどのように配列するか？	学問成果や子どもの実態をふまえ、教育内容の選択とその配列を工夫している	学習指導要領をふまえ、教育内容の選択と配列を行っている	教科書をふまえ、教育内容の選択とその配列を行っている		
	授業論	授業の目標		4	授業の目標は何か？ 授業内容と授業方法から達成できるか？	達成できる		部分的に達成できる	達成できない
				5	授業の内容は子どもたちにどのような能力を習得させようとしているか？	自己管理能力	人間関係能力	対物関係能力	意思決定能力
		授業の内容	生活の科学的認識	5	授業の内容は子どもたちにどのような能力を習得させようとしているか？	生活と時間・空間・金銭・健康とのかかわり	個人・家族・地域社会の人間関係の仕組み	衣・食・住・エネルギー・資源の科学的性質 資源循環の仕組み	生活と情報とのかかわり
			生活とかわること	6	具体的な生活技能能力 (□ をチェック)	<input type="checkbox"/> 時間管理 <input type="checkbox"/> 空間管理 <input type="checkbox"/> 金銭管理 <input type="checkbox"/> 健康管理	<input type="checkbox"/> 説明・交渉 <input type="checkbox"/> 協働 <input type="checkbox"/> サポート	<input type="checkbox"/> 製作 <input type="checkbox"/> 活用 <input type="checkbox"/> 整備 <input type="checkbox"/> 処分	<input type="checkbox"/> 情報収集 <input type="checkbox"/> 推論・批判 <input type="checkbox"/> 判断・決定 <input type="checkbox"/> 評価
	授業の方法		8	授業の方法は、子どもたちが授業の内容を納得・理解できるものか？	納得・理解できる授業の方法がとられている	納得・理解するには、他の授業の方法の方が利点がある	納得・理解する授業の方法が考慮されていない		
	② 授業計画能力	教材の選定・研究	教育内容とのかかわり	9	教育内容との関連が適切な教材を選択しているか？	適切な教材を選択している	教材が不足していたり、他の教材の方が利点がある	教育内容とのかかわりが考慮されていない	
			子どもとのかかわり	10	子どもの発達段階や実態に即した教材を選択し、資料として準備できているか？	適切な教材・資料を選択している	教材・資料が不足していたり、他の教材・資料の方が利点がある	子どもとのかかわりが考慮されていない	
学習課題の設定		学習課題の設定	11	子どもが授業で獲得すべき教育内容を、学習課題として簡潔に表現できているか？	適切に表現している	他の目標・学習課題の方が利点がある	教育内容と学習課題とのかかわりが考慮されていない		
		事例や知識の配列	12	授業における事例や知識の配列は適切か？	授業全体で適切な事例や知識の配列が行われている	授業の一部で事例や知識の配列が適切ではない	授業全体で事例や知識の配列が適切ではない		
		学習過程の構成的問いの設定	13	授業で習得すべき知識を引き出す問いを準備しているか？	習得すべき知識を引き出す適切な問いがある	問いが不足していたり、他の問いの方が利点がある	習得すべき知識を引き出す問いが考慮されていない		
学習評価論		子どもの活動	14	どのような子どもの活動が組み入れられているか？	子どもの主体的な活動がある	教師の指示のもと、子どもたちが行う活動がある	子どもの活動は組み入れられていない		
		板書計画	15	授業内容や学習過程を示す板書となっているか？	授業内容や学習過程を示す板書となっている	他の板書の方が利点がある	授業内容や学習過程を示すことが考慮されていない		
③ 授業展開力	学習評価論		16	授業を通して子どもたちが身につけたものとして、何をどのように測定して評価するか？	授業で学習した内容や方法を適切に確認し、授業改善にいかそうとしている	授業で学習した内容や方法の一部を確認している	授業で学習した内容や方法とは無関係に学習評価を行う		
			17	授業者の家庭科観にもとづいて、授業計画が立案されていたか？	授業者の家庭科観にもとづいて、授業計画を立案することができる	授業者の家庭科観の一部もとづいて、授業計画を立案している	授業者の家庭科観にもとづいていない授業計画を立案している		
			18	授業計画を実行することができたか？	臨機応変に実行できた	計画通りには実行できた	不十分しか実行できない		
④ 授業分析力			19	あなたは、カルテの診断項目に従って分析することができましたか？	カルテの診断項目を利用して、授業全体を分析することができる	カルテの診断項目の一部を利用し分析できる	カルテの診断項目を利用しない分析を行う		
⑤ 授業改善力			20	あなたは、カルテの診断項目のうち、改善すべき項目の改善を提案することができましたか？	授業者の家庭科観にとらわれず、よりよい授業への改善を提案することができる	授業者の家庭科観に沿って、よりよい授業への改善を提案することができる	授業を改善する提案ができない		

過程において、どのような議論がなされたり、課題が浮上したりしたかを見ていくにあたって、「支援シート」が、どのようなものであるかを確認しておきたい。

表1に、6月当初に作成された「家庭科授業支援シート①」の内容を示している。この時点での「支援シート」は、①家庭科教科観、②授業計画力、③授業展開力、④授業分析力、⑤授業改善力の5つの大項目から構成されている。そして、それぞれの大項目の中に、さらに詳細な下位項目が設定されている。それらそれぞれの項目は、A～Cの3段階のレベルでチェックを行う形式となっており、そのチェックの際の判断の根拠を、「診断根拠」として記載する欄が設けられている<sup>3</sup>。

このシートを、公開授業や研究授業等の授業研究の際に、授業者と参観者がそれぞれ使用する。授業者は、授業の計画、準備段階でもシートを活用して自身の授業力量を確認することが可能である。参観者は、授業を参観する際にシートを使用することによって、授業を観る視点を得ることができる。それによって、事後の協議会（授業検討会）の議論の深まりと活性化を実現しようとしている。

では、6月当初に作成された「家庭科授業支援シート①」の大項目のうちのひとつである、①家庭科教科観の内容について具体的にみていくことによって、「支援シート」の構成上の特徴を確認

したい。

①家庭科教科観では、授業者の家庭科観を明らかにするために、家庭科のあり方について記載する項目（「教科論」「目標論」「カリキュラム構成論」と、家庭科授業のあり方について記載する項目（「授業論」）から構成されている。「教科論」では、なぜ学校教育において家庭科という教科が必要なのか、「目標論」では、家庭科という教科は何をめざすべきなのかについて記載するようになっている。「カリキュラム構成論」については、カリキュラムとして何をどのように配列するかについて、「学問成果や子どもの実態をふまえ、教育内容の選択と配列を工夫している」、「学習指導要領をふまえ、教育内容の選択とその配列を行っている」、「教科書をふまえ、教育内容の選択とその配列を行っている」という3つの段階を設け、その選択した段階についての根拠を記載するようになっている。「授業論」は、「授業の目標」、「授業の内容」、「授業の方法」の3つに区分されている。「授業の目標」では、授業の目標が何かを記載し、授業内容と授業方法からそれが達成できるか否かを「達成できる」、「部分的に達成できる」、「達成できない」の3段階から選択し、その根拠を記載するようになっている。「授業の内容」は、さらに「生活の科学的認識」と「生活とかかわること」に区分されている。

これらの区分や内容は、家庭科教育学の研究知

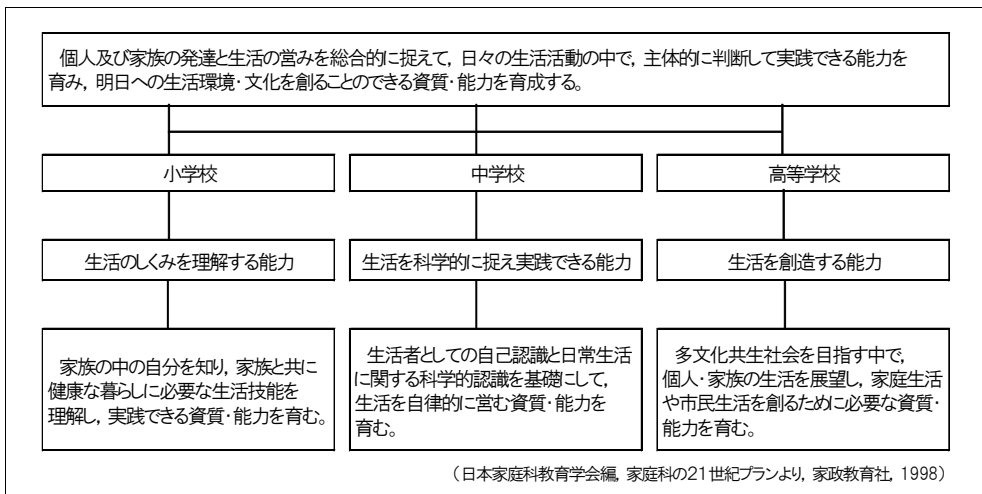


図2. 家庭科教育が育む「生きる力」の概念図

見に基づき設定されている。たとえば、家庭科教育学研究では、家庭科で育成すべき力を図2のような概念図で捉えている。ここでは、育成すべき力として、小学校では、今まで支えられて生活してきた家庭生活を見つめなおす力、すなわち「生活のしくみを理解する能力」が挙げられている。中学校では「生活を科学的に捉え実践できる能力」が、高等学校では「生活を創造する能力」が挙げられている。これら各学校段階での能力育成のために、小学校では生活の知恵や伝統を再認識しながら家庭生活の事実認識をし、生活創造のために必要な生活技能の獲得を、中学校では生活の社会的・自然的認識をし、生涯をととしての生活創造の基礎となる生活技術の獲得を、高等学校ではこれらをふまえて、生活の総合的認識をし、この社会に共に生きる市民としての社会参加を行い、個人・家族の自己実現にむけて適切な生活経営能力を身につけさせることが目標とされている。

また、その他の育成すべき能力として「生活問題解決能力」を挙げることができる。「生活問題解決能力」は、生活の構造との関係で考える必要がある。家政学者Ellen H. Richards<sup>4</sup>は、人と環境との関係を人間と社会的環境の関係、人間と物的環境との関係、人間と第三者の環境（情報環境）としており、これらの関係に働きかける能力として以下の能力をあげている。

- ①自己管理能力  
自分自身の生活問題を解決するための能力
- ②人間関係能力  
人と他者・社会との関係における問題を解決する能力
- ③対物関係能力  
人と物・自然との関係における問題を解決する能力
- ④意志決定能力  
人と生活情報との関係における問題を解決する能力

「支援シート」は、以上の知見を踏まえて、「授業の内容」を「生活の科学的認識」と「生活

とかかわること」に区分している。そして、「生活の科学的認識」では、授業の内容は子どもたちにどのような能力を習得させようとしているかについて、「生活問題解決能力」の4つの能力を挙げ、その中で該当する具体的な能力にしるしをつけるようになっている。「生活とかかわること」では、授業の内容は子どもたちが生活とかかわっていく視点を示しているかA～Cの3段階から選択し、その根拠を記載するようになっている。ここから、6月当初の「家庭科授業支援シート①」は、家庭科教育学の専門的な研究知見に基づいて内容が構成されていることが確認できる。

#### 4. 開発過程で出された意見と「支援シート」の変遷

では、「支援シート」の開発過程において、現場の家庭科教諭から出された意見や、プロジェクトメンバーでやりとりされた議論の内容や直面した課題、それらを踏まえて修正されていった「支援シート」の内容の変遷について、具体的に確認していく。表2に、開発過程で出された意見と検討内容を整理している。

第1回の検討においては、専門的な研究知見に基づき作成された「家庭科授業支援シート①」に対して、「文言が難しい」「免許外や新任の先生でもわかるようなものになるとよい」といった、「支援シート」の内容の専門性の高さに対する意見が出されている。それらの意見を受け、「家庭科観」の「カリキュラム構成論」は、「カリキュラムとして何をどのように配列するか？」という表現から「カリキュラムを作成するにあたってどのようなことに気をつけているか」という表現へと修正がなされ、選択式ではなく各教員が自身の考えを自由に記載できる自由記述式に改められている。また、家庭科教育学の専門的な研究知見に基づき構成されていた「授業論」の項目は、「授業の内容」を「知識・技術」、「能力・態度」、「生活と関わること」の3分類へと変更され、「自己管理能力」や「人間関係能力」といった専門的表現は削除された。

そのような修正がなされた「家庭科授業支援シート②」であるが、6月25日の授業研究におい

表2. 開発過程で出された意見と検討内容

		出された主な意見
		→ 改善案・検討内容
第1回検討 6月18日		・家庭科教員の資質向上を目指すものになるとよい → 家庭科室の設営や教科への愛着が持てるような空間づくりといった項目は入れることが出来ないか
		・研修等で使えるものになるとよい
		・免許外や新任の先生でもわかるようなものになるとよい
		・自己評価なのか他者評価なのかを明確にした方がよい
		・文言が難しい
		・ハード面についての項目を取り入れたらどうか
		・教師としてのハード面・ソフト面、授業者としてのハード面・ソフト面で項目をわけて示したらどうか
		・「授業改善能力」になるようなシートに → 授業の反省点・改善点を次にどう生かすか
		・各項目は教師の視点だが、生徒の変容はどう捉えるのか → 反省点・改善点の整理の方法
		・評価基準はどう設定するのか ・パッと見てわかる方がよい ・領域による視点の違いにはどう対応するのか
第2回検討 6月25日		・聞きなれない用語が多い ・もっとわかりやすい項目になるとよい ・「家庭科観」の項目が記入しにくい ・学習指導案と対応できるようにするとよい → 学習指導案と同じ構成にする 項目を「目標」「内容」「本時の目標」「授業の方法」に 項目に「題材設定の理由」「教材観」「授業観」「生徒観」「評価基準」など、 学習指導案で利用する用語に統一 → 本時の目標については、家庭科の評価基準と同じに
		・3段階での判断は難しい → 4段階に
		・中学校は免許外の教員が担当することが多い ・支援シートの普及が免許外の先生へのサポートになるのでは ・免許外の先生でも家庭科を学問的に教えることができるようになればよい → ただし、研究会等への参加には抵抗があるため Web などの活用が重要 ・教育センターでも免許外向け研修や土曜講座を開設しているが、参加人数は年々減少している → 学校行事等と重なると難しい → 希望しても休みがもらえず難しい
		・免許外の先生からすると他教科のことはわからない → 教科性を理解できるようなシートに修正 ・支援シートをする前に指導内容や指導方法などをベースに → 教科外や他教科の先生や実習生でもわかるように ・支援シートの前段階のレベル → 毎時間使えるようなもの ・授業は頭でわかっていてもできない → 1時間の授業がみえてくるもの
第4回検討 7月24日 9月22日		・教員の資質については、経験が大きい ・支援シートをもっと使いやすく → 他教科の先生でも使えるようなもの（指導案と一緒に配って）
		・自己評価にも使える → 授業者に返ってくるようなもの
		・免許外の先生は教え方がわからないので、模範となるシートがあれば授業しやすい → 使い方・活用の仕方など補助説明が必要
		・2段階のチェックは難しい → 4段階のチェックへ
		・記入しにくい → 記入欄の大きさを検討
		・授業支援シートの活用により授業分析につながる しかし、教員の資質向上ということを含めると現在のチェック項目だけでは難しい → 授業者自身の表情・姿勢・行動等をチェックできるような項目を作成
第5回検討 10月15日 10月19日		

て実際に使用した家庭科教諭からは、「聞きなれない用語が多い」、「もっと分かりやすい用語、項目になるとよい」、「家庭科観の項目が記入しにくい」、「学習指導案と対応できるような授業支援シートになれば使いやすい」、「3段階での判断は難しい」などの意見が出されている。その結果、

表 3. 家庭科授業支援シート③「家庭科観」部分

チェック項目				A	B	C	D				
① 家庭科観	教科論		1	なぜ家庭科は必要か？	(自由記述)						
			2	家庭科は何をめざすべきか？	(自由記述)						
			3	カリキュラムを作成するにあたってどのようなこと気をつけているか？	(自由記述)						
	授業論	授業の構成論	授業の目標	4	授業の目標は何か？	(目標)					
				5	教材設定の理由	5	教材観・授業観	(自由記述)			
						6	生徒観	(自由記述)			
		本時の目標	観点別	7	生活や技術への関心・意欲・態度	(自由記述)					
				8	生活を工夫し創造する能力	(自由記述)					
				9	生活の技能	(自由記述)					
				10	生活や技術についての知識・理解	(自由記述)					
				生活と関わること	11	11	授業の内容は、生徒たちが生活と関わっていく視点を示しているか？	生徒たちが生活と関わっていく行動を要請させている	生徒たちが生活と関わっていく視点を提示している	生徒たちが生活と関わることはあ まり規定していない	生徒たちが生活と関わることは 規定していない
		12	授業の方法			12	授業の方法は、生徒たちが授業の内容を納得・理解できるものか？	納得・理解できる授業の方法がとられている (診断視鏡)	ある程度納得・理解できる授業の方法がとられている	納得・理解するには他の授業の方法の方が利点がある	納得・理解する授業の方法が考慮されていない

「家庭科授業支援シート③」では、「家庭科観」の項目は、表3に示した内容へと、大きく変更がなされている。表3からわかるように、「授業論」の項目には「本時の目標」が追加され、「授業の内容」は「題材設定の理由」として「教材観・授業観」、「生徒観」の欄が追加されている。追加された「本時の目標」は、「観点別」と「生活と関わること」の2つに区分されている。「観点別」の項目は、学習指導要領中学校技術・家庭科（家庭分野）の評価基準である「生活や技術への関心・意欲・態度」、「生活を工夫し創造する能力」、「生活の技能」、「生活や技術についての知識・理解」の4つの項目が設定されており、自由に記載できる形式が採用されている。6月当初の「支援シート④」からみれば、各項目の文言が大きく変更されており、学問的・専門的な内容よりも、実際に活用する教員が理解しやすい表現、現場で使用されている用語で記述することが優先されていることがよくわかる。また、現場にとっては、学習指導要領や学習指導案の内容との対応度が高い方が、使い勝手が良いと受けとめられている。

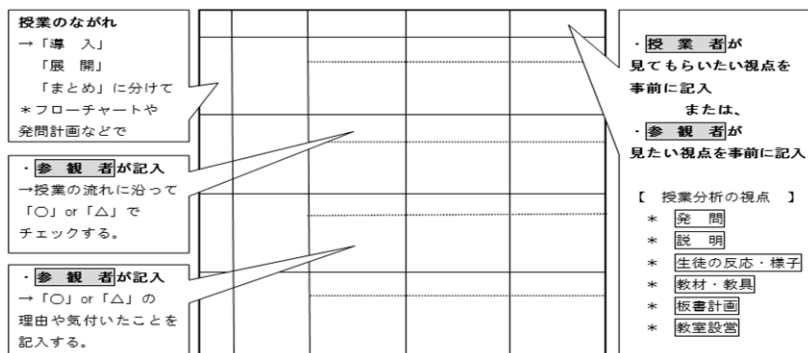
7月から9月には、大学生の模擬授業での使用後のアンケート調査結果や、これまでの家庭科教諭からの意見を参考に、「家庭科授業支援シート④」の開発に関する検討がなされている。そこで確認されている課題は、表2にも挙げられているように、「毎時間使えるもの」、「1時間の授業が見えてくるもの」、「他教科の先生でも使えるようなもの」などの意見に代表される、使いやすさの向上と、「授業者の自己評価には向いているが、参観者の他者評価としては使いにくい」という意見をふまえた、授業研究で参観者が考えを記載しやすい形式への変更である。その結果、「家庭科授業支援シート④」では、指導案の授業の流れに沿って「説明・発問」、「生徒の反応・様子」、「教材・教具」の3つの視点で授業を分析する形式に大幅に変更がなされ、それぞれの項目を◎・△で評価し、気づいた点を記入していくシートが作成された。その後、さらなる試用を経て、◎・△の2段階でのチェック形式では判断が極端に難しいとの意見が出されたため、「家庭科授業支援シート⑤」では、◎・○・△・×の4段階でチェックする形式へと変更された。この段階で、「支援

「家庭科 授業支援シート」の活用の仕方

授業支援シートのねらい

「授業支援シート」とは、授業者の先生と参観者の先生方が、授業の優れた点や課題を相互に明確にし、授業研究を活性化するためのコミュニケーション・ツールです。

授業支援シートの使い方



過程	授業の流れ	説明・発問	生徒の反応・様子	教材・教具
導 入	・前時の理解確認をする。	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×
	・鹿児島の食品や食文化についてのクイズに答える。	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×
	・学習課題を設定する。	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×
展 開	・鹿児島の郷土料理の名称について発表する。	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×
	・調べてきた鹿児島の郷土料理の、由来や材料、歴史について班で情報交換し、発表する。	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×
	・知っている鹿児島の食材についてまとめ、発表する。	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×
	・地域や季節の食材を利用する利点について「シェアリングボード」にまとめ、発表する。	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×
終 末	・今日の学習について、未来に伝えたいことをワークシートにまとめる。	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×
	・次時の学習の内容を知る。	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×	◎ ○ Δ ×



授業者チェック項目（ して下さい）

表情	やわらかさ	◎	○	△	×
	緊張	◎	○	△	×
	笑顔	◎	○	△	×
姿勢	立ち方	◎	○	△	×
	立ち位置	◎	○	△	×
	机間指導	◎	○	△	×
板書	字の大きさ	◎	○	△	×
	見やすさ	◎	○	△	×
	強調	◎	○	△	×
	教室設営	◎	○	△	×
言葉づかい	正しい日本語	◎	○	△	×
	指示語	◎	○	△	×
	あいまいな言葉	◎	○	△	×
	口癖	◎	○	△	×
音声表現	声の大きさ	◎	○	△	×
	話す速さ	◎	○	△	×
	声のトーン	◎	○	△	×
	間	◎	○	△	×
	プロミネンス	◎	○	△	×
	抑揚	◎	○	△	×
	感情	◎	○	△	×

表現	視点
声の大きさ	声が大きすぎると威圧的な印象を与える恐れがある。 逆に声小さすぎると、情報が正しく伝わらない。 また、相手に自信がないような印象を与える。
話す速さ	速め（300字/分）                      やや速め（250字/分） ほぼ標準（200字/分）                  ゆっくり（150字/分）
声のトーン	「トーン」とは、声の高さ、低さ ドレミでいうと「ソ」が第一声に適した声の高さ
間	「間」とは、話の途中で一呼吸おく。 印象に残したい言葉や注目を引きたい言葉の前に「間」を取ると分かりやすい。 話すときに適切な「間」を取ると、理解しやすい。
プロミネンス	「プロミネンス」とは、文章で重要な部分を際立たせて話すこと。 キーワードや聞き取りづらい言葉などを大きな声でゆっくりと話すことで強調される。
抑揚	「抑揚」とは、文章の高低による変化 問いかけや質問は語尾を上げる。 断定的に話すときは語尾を下げる。
感情	感情が込められていなければ、相手に正しく伝わらない。 相手の心情に合った感情を乗せて話す。

資料 1. 家庭科授業支援シート⑤：授業展開と対応した形式

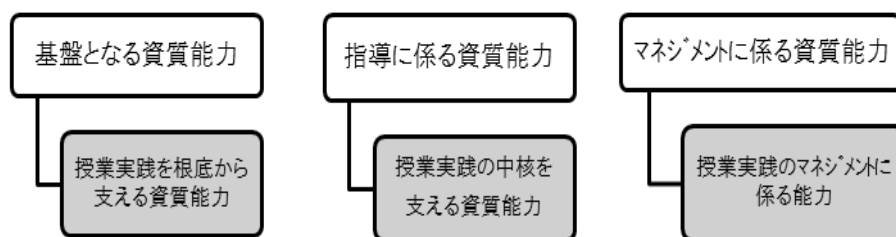
## 「家庭科 授業支援シート」の活用の仕方

### 授業支援シートのねらい

「授業支援シート」とは、授業者の先生と参観者の先生方が、授業の優れた点や課題を相互に明確にし、授業研究を活性化するためのコミュニケーション・ツールです。

### 授業実践力の診断の観点

授業実践力の診断の観点は以下の3つの側面があります。  
この授業支援シートはこれらの観点を3つのシートから分析し、教員研修に役立てたいと考えています。



シート1  
＜基盤編＞

シート2  
＜指導編＞

シート3  
＜マネジメント編＞

項目	授業の流れ	初期・中期				全期の総合・様子				教師・結果	評価	コメント
		1	2	3	4	1	2	3	4			
導入	視覚・聴覚刺激を行う。											
	授業者の説明・指示をしっかりと聞く。											
	学習意欲を高める。											
	授業者の話を聞きながら自分の考えを整理する。											
展開	自分の考えを整理し、自分の考えを表現する。											
	自分の考えを整理し、自分の考えを表現する。											
	自分の考えを整理し、自分の考えを表現する。											
	自分の考えを整理し、自分の考えを表現する。											
まとめ	自分の考えを整理し、自分の考えを表現する。											
	自分の考えを整理し、自分の考えを表現する。											
	自分の考えを整理し、自分の考えを表現する。											
	自分の考えを整理し、自分の考えを表現する。											

授業者が記入

参観者が記入

参観者が記入

授業後、3つのシートを使って授業分析

↓  
教員の資質能力のアップに

資料2. 家庭科授業支援シート⑦

シート」は資料1に示したように、縦軸に「導入」「展開」「終末」、横軸に授業を観る視点「説明・発問」、「生徒の反応・様子」、「教材・教具」が配置しており、授業参観者が授業を観察する際の手続き、すなわち、授業の流れに沿って、指導案を見ながらメモをとっていくという、多くの現場の教員にとってこれまでも馴染みのある構成となっている。

しかしその一方で、表2の第5回検討の際に把握された意見からも確認できるように、「授業の分析・改善は行えるが、授業者自身の力量向上にはつながりにくい」という課題が新たに浮上することとなった。その結果、授業を分析し改善するためには、「授業者の教員としての基盤となる資質能力」、「授業を行うための指導に係る資質能力」、「マネジメントに係る資質能力」の3つの観点からみる必要があるのではないかという結論に達し、「支援シート」を「基盤編」、「指導編」、「マネジメント編」の3つに分けて構成する案が採用されるに至っている。「基盤編」には「支援シート③」、「指導編」には「支援シート⑤」が充てられ、「マネジメント編」は「支援シート⑥」に編集を加えた新たなシートが作成されている。「マネジメント編」のシートには、「姿勢」、「言葉づかい」、「音声表現」、「板書」、「教室設営」という項目が設けられている。

以上のような意見把握や議論・検討を経て、資料2に示した3種のシートからなる「家庭科授業支援シート⑦」の形式が生み出された。その使用後は、「指導編だけよりも、基盤編とマネジメント編があることで教師の資質も見ることができるようになってよい」、「マネジメント編は他教科でも使えるような内容である」といった評価の一方、「指導編とマネジメント編の両方を一人でするのは難しい」といった課題や、「繰り返し使うことで成果がでるのでは」、「マネジメント編は、新任の場合は他者によるチェックに、ある程度経験を積んだ教員の場合は自己チェックに使うのはどうか」、「項目が多いので、集計プログラム等が開発されると多忙な学校現場においても研修等で使いやすい」といった意見が出されている。

## 5. 現職教員の抱く職能成長観と研究課題

以上、「支援シート」の開発過程において、現場の家庭科教諭から出された意見や、修正されていた「支援シート」の内容から、現職教員が抱えている力量観や職能成長観の内実と、現職教員の職能成長を考えるうえで重要な論点が浮き彫りになった。

1点目は、教員に求められる力量は、チェックリストのような形式で把握できるものと、状況や文脈に応じて把握すべきだと考えられているものが存在していることである。そして2点目に、そのどちらのタイプも教員の職能成長には必要だと認識されていることが確認できる。それは、授業者が自身の力量を把握する際には、あらかじめ定められた項目でチェックをしたり記述をしたりする形での自己評価が、ある程度有効だととらえられている一方で、研修や研究会等における授業参観においては、授業者が観てもらいたい事柄や校内や研究会の研究テーマに応じて項目を柔軟に選択し、授業の展開に沿って考えを記載していく方が、現場での現実的な使い勝手や有効性が高いという意見に現れている。そしてそれらは、「家庭科授業支援シート⑦」における、目的別の3種類のシート構成に具体化されている。このような教師の力量のとらえ方は、教師の実践的能力が、形式知と暗黙知の側面を併せ持っているという研究知見<sup>5)</sup>とも一致している。

3点目は、キャリアや職能成長の段階の違いに対応したツールや使い分けの必要性が指摘されていることから、教師の職能成長は一律ではなく、それぞれの状況や課題に応じたツールが必要だと認識されていることがわかる。今回の例でいえば、同じチェックリスト型のシートでも、初任期教員は他者評価してもらうツールとして、熟練教員は改めて自己を振り返る自己評価のためのツールとして使用するといった、キャリア段階に応じた柔軟で多様な使い方が提案されている点が、注目に値しよう。すなわち、教員の職能成長を実現していくうえで、ツールの開発はそれ単体だけでなく、それをを用いた授業研究や研修の運営方法の開発と一体でなければならぬことが確認できる。

また、ここでは、教員の職能成長のためのどんな仕組みやツールも、教員に求められる力量のすべてをカバーするものではなく、その中のある一部分を対象としているものであることを、あらかじめ共通理解しておくことが必要となるだろう。多くの場合、その共通理解が不完全なため、すべてをカバーしようとしてチェック項目が膨大な量になったり、「すべてを網羅することなど不可能なのだから無意味だ」というあきらめや形骸化を生んだりしてしまう<sup>6</sup>。

4点目は、教師の職能成長を支援するツールは、現場の理論と整合性が高く、わかりやすいことが求められているということである。特に今回の事例では、学習指導要領や学習指導案の形式や内容との整合性が重視されており、文言や表現についてはより平易なものが好まれ、学術的な研究知見や専門的な内容・表現に対しては親和性が低かった。これは、家庭科の特徴として、各学校における教員の配置数が1名または2名程度であり、免許外の教員や他教科と兼担している教員が多いことが影響していると考えられる。しかしながら、だからといって、家庭科に関する専門的研究知見や専門性を身につけなくても良いというわけではない。現場の実態に合わせて平易な内容にすることは、使い勝手が向上する一方で、専門性を軽視する危険性を孕んでいる。プロジェクトメンバー間での意見交換においても、家庭科に関する専門性を有していない教員の職能成長をどのように支援するかが極めて困難な課題となっていることが何度も語られた。

この事実からは、教師教育上の課題として、教科ごとに専門性を高める授業研究とともに、教科をこえた協働による授業研究の機会を作っていく必要性が確認できる。学校内の教員配置数が1名である教科の教員の日常的な職能成長には、教科をこえて学びあえる授業研究を営むことのできる条件の整備が不可欠である。教科が異なっても気軽に互いの授業を参観でき、授業について語り合えるためのツールの開発とともに、そのような授業研究の運営方法の開発が、学校と教育委員会や大学教員等専門家との協働のもとで進められていかなければならないだろう。

最後に、職能成長を支援するツールの開発は、専門家との協働を基盤とした現場主体で行う必要があるということである。現場にとって本当に必要なツールは、現場の理論に基づいていることが不可欠であるとともに、専門的な研究知見による裏付けもまた不可欠である。今回、「家庭科授業支援シート⑦」において採用された、〈基盤編〉〈指導編〉〈マネジメント編〉という目的別の3種類のシート構成は、現職の家庭科教諭主体で導き出されたものである。同時に、その各々の内容やシート構成の妥当性は、家庭科教育学や教師教育の専門的研究知見によって裏づけがなされている。

どのようなツールも最終的には現場の状況変化に応じて現場で自律的に作りかえていく必要があるため、開発と活用のノウハウは現場に根づいていかなければならない。その意味で、開発主体は現場の教員であることが望ましいといえよう。しかし同時に、今回の事例で、学問的・専門的な内容は難解なため、教員が理解しやすい表現やより平易な表現が優先されていったことが確認されたように、専門的な内容の深まりや専門性の向上につながる契機は、大学教員等専門家による支援がなければ実現が難しい。ゆえに、専門家との協働を基盤とした現場主体の営みをいかにして実現していくか、その現実的な方法論の構築が、現職教員の職能成長を実現していくうえでの重要な課題として認識される必要があるだろう。

註

<sup>1</sup> 平成22年度独立行政法人教員研修センター「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」採択事業においては、国語、社会、算数、理科、音楽、家庭、外国語活動の7プロジェクトにおいて「授業研究支援シート」の開発が進められた。本稿が対象とするのは、そのうちの家庭科プロジェクトの取り組みである。プロジェクト全体の詳細については、鹿兒島大学教育学部 (2011) 『平成22年度独立行政法人教員研修センター「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」採択事業「実践的な力量形成・自己開発を実現する教員研修モデルカリキュラム」の開発Ⅱ－汎用化に向け

た授業研究支援シート及び教員研修の協働づくりに関する研究－成果報告書』を参照されたい。

<sup>2</sup> 本稿では、プロジェクトにおいて主に大学教員が用いる学問的な概念や専門的な研究知見や表現に対して、「学校では～」、「現場では～」という形で語られることに代表されるような、学校現場の教員が抱えている認識や物事の考え方、優先事項、独自の表現などを総称して表現する際に、便宜上「現場の理論」という表現を用いることとした。

<sup>3</sup> 「家庭科授業支援シート①」は、平成21年度「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」採択授業の一環として行われた「実践的な力量形成・自己開発を実現する教員研修モデルカリキュラム」の開発より報告された、「授業実践力診断カルテ：社会編」を参考に作成されている。

<sup>4</sup> Ellen H. Richards' (1904) : The Art of Right Living, Whitcomb & Barrow, Boston.

<sup>5</sup> たとえば、松木健一（2008）「学校を変えるロングスパンの授業研究の創造」秋田喜代美・キャサリン・ルイス編著『授業の研究 教師の学習－レッスンスタディへのいざない』明石書店、186-201ページが参考になる。

<sup>6</sup> この点について、たとえば教員評価研究においては、教師の成長を教員政策で保障しようとするとき、それは成長という概念で示されるものの中のごく限定的なものでしかないことを確認しておくことの重要性と、それが共通理解されていないことが、教員に求められる力量や教師の成長すべてを対象としようとしてしまい、混乱や問題をうむ要因となっていることが指摘されている。詳しくは、油布佐和子（2010）「教師の成長と教員評価」苅谷剛彦・金子真理子編著『教員評価の社会学』155-175ページを参照されたい。